58. いじめ問題を考える（8） ー旭川市の中学生イジメ問題ー

（以下の文では「イジメ」と記すが、引用の場合はその文に従います）

「10人の加害者の未来と1人の被害者の未来、どちらが大切ですか。10人ですよ。1人のために10人の未来をつぶしていいんですか。どちらが将来の日本のためになりますか。もう一度、冷静に考えてみてください」

こう言い放ったのは、娘へのイジメで困り果てた母親が相談していた教頭だった。あり得ない発言に、ただ驚愕する。

北海道旭川市で今年3月、中学2年の女子生徒が凍死しているのが見つかり、背景にイジメがあったとされる問題で母親の手記が公開された。母親は、「いじめに遭っているのではないかと、学校、教育委員会に何度も相談したが、学校、教育委員会は、被害者も、家族も、どれも相談することはなかった、いじめの認知には至らなかった、などと繰り返し主張し、教育委員会の態度は、『いじめ』をもみ消そうとしているようにさえ見える」と批判する。冒頭の発言内容は、その手記の中に記されているもので、母親はその言葉を聞き「泣くことしかできなかった」とも記している。そして、当時の経緯を調べている第三者委員会について、「公平で中立な調査が行われているのか、誰が、どんな調査をして、本当に真実に迫ろうとしているのか。調査の進捗に関する情報が極端に少なく、調査委員会の動きをどう評価すれば良いのか、いまだ戸惑っている」と違和感と疑問を表明している。

私は手記と、「文春オンライン」特集班の記事の全文を読んでみた。その内容が事実とすれば（いや事実だろう）、それこそ凄惨なイジメの実態は明確な犯罪事件だと思う（死因は現在特定されていない）。と同時に当該中学の担任・教頭・校長の無責任以上の人間性を欠く対応にどうにもならない失望を感じる。

記すには憚れる内容も多く、下記程度の書き方ではイジメの悲惨さが伝わらないかも知れないが、文春オンラインなどから事の経緯を少しまとめる。3つの中学校と、主に5名の加害者が出てくる。X中学はイジメ後に転校した学校。Y中学は2019年4月から9月までイジメを受けた時の学校でA子、B男がいた。Z中学にはC男、D子、E子が通っていた。

2019年4月被害者は地元のY中学校に入学（「小学ではちょっと目立ちたがりなところがあり、声が大きく快活で、みんなを引っ張っていく明るい女の子」と手記にあり）。4月中旬公園で上学年のA子と知り合う。A子の友人のB男、C男とも知り合う。間もなくA子、B男、C男によるイジメにあう。5月には「お母さん、死にたい」という。また深夜に呼び出されもした。

6月3日C男が脅迫（わいせつ動画・写真を要求）しイジメが露骨になる。この間、4月に1回、5月に2回、6月に1回、担任の先生にイジメの調査をお願いするも「あの子どもたちはおバカだからイジメなどない」「今日は彼氏とデートなので相談は明日でもいいですか？」などと取り合ってくれなかった、という。6月15日A子らが公園に呼び出し、複数人で被害者を囲み自慰行為を強要。D、E子もいた。わいせつ写真で脅迫されLINEで拡散されもしている。

6月22日被害者はA子ら10人近くに囲まれた挙げ句、4mの高さの土手を降りて、川へ飛び込んだ事件が発生。川に飛び込むとき皆なが携帯で撮影も。この件では警察も出動。その後被害者は入院。9月退院後引っ越しをし、市内の別のX中学校へ転校。イジメの後遺症に苦しめられPTSD（心的外傷後ストレス障害）と診断される。学校に通えず自宅で引きこもる生活。2021年2月13日イジメによるPTSDで悩まされ失踪。3月23日凍死発見。

中学1年の被害者はABCの子らによって短期間に確実に追い込まれていった。それだけではない。冒頭の話をもとに母親から聞かされた被害者は「どうして先生はイジメたほうの味方になって、私の味方になってくれないの」と泣いたという。信頼でき守ってくれる筈の先生に絶望したのだ。子供を何とか助けようとした母親も学校からイジメられているようなものだ。

文春の記者は、Y 中学にイジメについて事実確認を求めたが、中学校は「個人情報により、個別の案件にはお答えできない」、旭川市教育委員会にも事実確認を行ったが「個別の案件にはお答えできない」と答えるのみだったと記す。事件当時 Y 中学に在籍していたある教員は、イジメの事実を認め取材班に「加害生徒には厳しく指導をした。泣いて反省する子もいれば、ウソをついて責任を擦り付けようとする子もいるなど、子供たちの反応はバラバラでした。被害者がどうしたら学校に戻れるか教職員間で話し合いを始めた矢先に転校してしまった」と言う。

また新聞記事は、「被害者が川に飛び込んだ後、母親は道警旭川中央署に被害を訴えたが、『未成年だから何も対応できない』と断られ不信感を抱いた」ことを伝える。その後、道警本部の市民窓口にも相談、関係する生徒の聞き取りが始まったという。しかし、道警は取材に対し「個別事案にはお答えできない」といつている。

このイジメは市教委が 4 月にいじめ防止対策推進法に基づく「重大事態」と認定し、「第三者委が 6 月にいじめの有無や死亡に至った経緯の調査に着手」したという。

こういった記事を見ると、学校や市教委、それに警察も、いかにも対応が遅く素っ気ないと思う。学校や市教委の HP を見ても、この件に関する発信は何もなく、父兄や市民に説明しようとする姿勢もないように思える。

イジメが往々にして大きな問題になるのは、担任や教頭・校長、それに教委などの一次対応の遅さ・認識不足と稚拙な対応にあるのだと思う。

Y 中学の素っ気ない HP には、19 頁程の立派な「いじめ防止基本方針」が掲載されている。それには制定年について「平成 26 年 4 月（令和 3 年 5 月改定）」とある。このイジメがあった時には制定されている。

「いじめ防止基本方針」は、「いじめ防止対策推進法」に基づいて多くの学校で制定されているが、各学校で議論された上で制定している筈だ。Y 中学のその第 1 章 1 項は、いじめ防止の基本理念として「全ての生徒が安心して学校生活（略）、いじめられた生徒の心身に深刻な影響を及ぼす許されない行為であることを生徒に十分に理解できるように（略）」と述べ、2 項でいじめの定義について「（略）児童が心身の苦痛を感じているもの」ときちんと述べている。勿論、「重大事態」のこともある。さらにこの学校特有のものと思われる立派な「いじめ発見見守りチェックシート」なるものも添付されている。

仏作って魂入らず。校長も教頭も担任も、さらに市教委も、イジメの定義さえ知らずにイジメはないと言っているに等しい。そのような人達にはイジメの対処ができる筈がないと思う。だから冒頭のような発言で被害者を二重に苦しめるのだ。このような組織は出直すしかない。

既述の「事件当時 Y 中学に在籍していたある教員」の話には違和感がある。いかにも対応を考えるのが遅いし、これだけのイジメを受けた生徒が元の学校に戻ることはできないからだ。深い心身の傷を負った問題に解決策があるとすれば、被害者に加害者を会わせないようにするしかない。本来なら加害者を転校させるべきだ。これ程までの問題は元の鞘には戻れないということを知らないのだろうか。それに、一体、Y 中学の他の先生方や教員組合はどういう態度でいたのか。これだけのイジメ事件を知らなかった筈がない。何故毅然と向き合わないのか。本当に知らなかったのなら、逆にそれだけで失格ではないか。

深刻なイジメ問題は、学校・教委の隠蔽体質と調査能力の欠如で問題を大きくしていることが多い。時には第三者委員会の内容も問題となる。被害者に目が向いていないからだ。関係する大人の責任は大きい。

（参考：「No.1 いじめ問題を考える」）

（2021 年 8 月 22 日）